

歌人の「生」に迫る短歌指導

——近藤芳美氏「戦争と戦後と」を中心に——

万代勉

(一)

「現代国語」で短歌を指導する視点はどこに置くべきか。望ましい教材としてはどのようなものが考えられるか。指導方法とかがわからせながら述べてみたい。

橋誠氏は、短歌・俳句の指導について、次のように指摘しておられる。

(指導上の方針)

(1) 短歌、俳句の理解・鑑賞が、日本文学を理解し、日本語の美しさを知らずともたいせつなことがわかるように指導する。

(2) 生徒の感想・批評を生かし、短歌・俳句が身近かなものであるように指導する。

(3) 人の作品を理解・鑑賞するだけでなく、みずから創作して心を慰め、表現の喜びを味わうような境地にまで指導する。

(目標およびその立て方)

(1) 短歌・俳句の形式や表現上の特色がわかり、それぞれの内容が読みとれる。

(2) 短歌的、俳句的な語い・語法・構成・表記に慣れ、短詩型文学

の特質がわかる。

(3) 短歌・俳句を読みながら、その声調が味わえ、ことばに対する感覚が鋭くなる。

(4) 短歌・俳句に特有な余韻、余情の世界がわかり、自然、人事に対する観察力が鋭り、詩的感受性が豊かになる。

(5) 作品を通して、作者のものの見方・感じ方・考え方がわかる。

(指導内容)

(1) 短歌・俳句の形式・区切れ (2) 格調 (3) 修辭法 (4) 史的概観と近代精神

(5) 主要作家の作風 (6) 独自性とその存在の意義 (7) 日本文化、日本文学との関係 (8) 創作

およそ、短歌・俳句について指導すべき内容は網羅されているように思われる。しかし、指導時間が10時間程度に限定される中で、

これほど多様な内容をどう指導すればよいのであろうか。

渡辺弘一郎氏は、「一般にそれ(短歌の指導の形)は、朗読、語積、文法、通釈、鑑賞、暗誦、感想文作成というような形で進むのが、以前からの類型を成しているようである。」と指摘されながら、

「よく見かける指導の型として、前述のような過程を機械的に細々しく追っていくものや、また作品を切り刻み、文学的香気を蒸

発させてしまふものがなしとしない。いわば生体解剖によって生命現象を把握しようとするようなものである。そういう重箱のすみをつついて替めまわすような方法に終始する限り、生徒は興味索然、魅力感喪失は疑えない」と、問題点を指摘されている。

しかし、従来のように、歌人ごとに有名短歌を数首ずつ抽出して時代順に排列する教材構成では、一首一首の分析・鑑賞に比重がかかって、前述のような欠点から逃れることはむずかしいと思う。

(II)

近藤芳美氏は、「なぜ、短歌などというものを作ろうと思ひ立つのでしょうか。そのときには、心の中に必ずひそかに何らかの表白・表現への欲望をいだいているに相違ありません。あるいは表白・表現のための心中の疼きであり、内部衝迫であるはずのものです。その疼きにせき立てられてわたしたちは歌を作ろうとし、内部衝迫のままに『詩歌』という文芸にみずからのことは語り出していくことを求めるものなのです。」と述べておられる。

私は、短歌の中に、この、歌人の「内部衝迫」「心中の表現への疼き」をとらえることが、短歌の授業の根本だと思ふのである。

自我に目覚めはじめる青春期には、その「心の疼き」は、内部に鬱積せざるをえない。無気力にも、無関心にも見える現代の高校生に、表現することのすばらしさと、表現することによって自分の生が他者とかかわりある姿を発見する手がかりを与える、そうした契機として短歌教材が生かされればと思ふのである。

(III)

(生徒) 生徒に短歌の授業についての希望を聞いてみた。結果を希望の多い順に示すと次のようになる。

- (1) 教科書以外の有名な短歌について学ぶ。
- (2) 歌人の伝記などを研究して、短歌の生まれた背景などを学ぶ。
- (3) 友達の作った短歌をみんな味わう。
- (4) 一人の歌人の作品をできるだけ多く読み、歌人の生き方を考える。

(5) 短歌の鑑賞文を学ぶ。

(6) 教科書の短歌を先生から教わる。

(7) 好きな歌の鑑賞文や情景文を書く。

(8) 教科書の短歌をみんな(グループ・個人など)で担当し、調べて発表する。

(9) 短歌の歴史について学ぶ。

一年生三クラスのアンケートの中で、(1)から(4)まではそれぞれ70人ほど、(5)から(9)までは30人ほどの希望があった。

以上の結果からみて、(1)にみられるように、有名作品主義が筆頭を占める反面、(2)、(4)のような、特定歌人を中心にして、その人間像や生き方を学びたいという希望が非常に多いことは、注目すべきだと思ふ。(6)がわずか32人しかいなかったのは、ともすると、研究書の受け売りや、教授者の印象批評の押しつけ、語法・句法中心の従来の短歌授業に対する反省を迫るものと言えそうである。

現代高校生は書くことが手で意欲に乏しいといわれながら、(3)が多くて希望を集め、(7)も相当数いたことを考えると、生徒の「

「自己表現」の力は、適切表現指導によって十分に高めることができると言えよう。

(四)

(注5) 武川忠一氏は、短歌の本質である抒情性と「自我」のかかわりが、近代短歌を成立させる契機であることを指摘して次のように述べられる。

「近代短歌において、自己の内のもう一人の自己が自己を語ることを確立しようとしたのはいつだったのか。短歌の場合、このことはなかなか微妙な問題を含んでいる。つねに情感の流れゆらぎが窮極で働いていなければならぬからである。何らかの意味で情感への自己陶醉を誘われるような傾向を持つからである。しかも、はじめからの陶醉は自己定位を解消に終焉させるような契機を含むのはいうまでもない。」

この観点に立てば、三省堂「新編現代国語」の短歌教材の扱いは、短歌の特質にふさわしい新しい試みとして高く評価できるのではなからうか。

(五)

「新編現代国語」の短歌教材は、第一学年だけに配当されており、第六單元「青春の情感」の(2)、(3)がそれに当たっている。

(1) 「少年」 北杜夫

(2) 「わが青春―短歌との出会い―」 近藤芳美

(3) 「髪五尺―短歌十五首―」

「少年」は、旧制高校に入学し、自我の目覚めを経験しつつある主人公が、北アルプスに独りででかけ、大自然の神秘に心を洗われ、自然に従順な人間の愛すべき生に思い至る自伝的小説である。

「わが青春」は、歌人として生きた原点としての、中学時代から高校時代にかけての短歌との出会い、それにかかわる現実社会へ開かれてゆく精神の軌跡を辿りつつ「短歌とは何か」を体験的に記したものの、「短歌十五首」は、近現代歌人の十代から二十代の青春の情感をよんだ短歌ばかりが選んである。

(六)

短歌教材としての観点から、各教材はどのような特色と問題点を持っているのであろうか。

(一) 「わが青春―短歌との出会い」

近藤芳美氏の、短歌を必然とする生き方へ到達する道筋が的確に描かれている。平素短歌にかかわりの薄い生徒への導入教材として、同年代への親近感もあり、適切な教材といえよう。

(注6) しかし「わたしたちのうたう「生」」は、わたしたち人間の「個」の世界、内部世界にだけあるものではないからです。それは「生活」「生涯」「人生」などとつねに外部世界に関わり、しかも今、その世界はかつてない厳しさ、険しさとしてわたしたちの「個」をめぐっています。それを、戦争と戦後とにつづく今日の歴史と言いました。今日、地上は限なく無数の核兵器に覆われ、人間はそのかげにわずかな平和にすがって生きています。(中略)そこに生き、そこでみずからの「生」を問うことを短歌とするなら、それは「現代」

と呼ぶ今の危機の日に、いかに生きるかという「生き方」の問いとなり、他に見ていく世界はもはやないとも言えます。短歌の「抒情」という意味をもし思うなら、その地点で、うたわれていく人間ひとりの心の表白となすべきでしょう。」と語る氏の文章にしては、本教材はあまりにも毒気を抜かれた教科書風の文章になってしまっている。

青春における自我の目覚めに焦点をしぼり、短歌に向かう必然を追求する文章ではあっても、そもそも、自我の形成それ自体が「敵しい壁の時代」との対決の中でなされたのであつてみれば、その壁がどんなものとして存在し、それにどう思うかで決対し、そこでどういう作品を生んだかが具体的に示されなければ、生徒を納得させることはできない。

(二) 髪五尺―短歌十五首―

すでに述べたように、この教材での短歌の選択、排列は単元主題にそったユニークなものである。

(採録作品)

「髪五尺」「その子二十」「胭脂色は」「なにとなく」(以上与謝野晶子)、「いのちなぎ」「やはらかに」「しらしらと」「新しき明日の来たるを」(以上石川啄木)、「秋づけば」「秋浅き」(以上中村憲吉)、「額に触るる」「挑みくる」(以上宮柊二)、「鞆に」(塚本邦雄)、「啼きそろう」(岡井隆)、「マッチ擦る」(寺山修司)

(教材採録のねらい)――指導書による――

① 同世代の歌ということで、各歌人の二十代前後の詠歌を選んだこと。

② 現代の青春には現代の短歌をという考えから、現代短歌、とりわけ戦後短歌三首を選んだこと。

③ 時代や個々の歌人の生活と結びつく短歌の詠嘆性がどのように形象化されているかが比較できるよう、近代を短歌がどう生き、通過しつつ、現代に生き続けているのかも考察可能のように時代順に並べたこと。

④ 民族詩としての短歌が、戦後新しい道を開拓している現実立ち、思想の短歌としての戦後短歌の位置づけを考慮したこと
があげられている。

①・②に見られるように、単元主題をふまえながら、③の「近代」と短歌とのかわり、④の思想の短歌の導入、とりわけ戦後短歌の大胆な採用などは、新鮮な試みとして評価されなければならぬ。

しかし、教材の選択がテーマに沿ってなされたにしても、歌人一人に一首や二首の歌では、そのテーマに対する叙情や思想の深さ、重さをわかり抜くことは無理であろう。

生徒が短歌学習に求めた歌人の生き方や思想への関心にかたえるためには、同一歌人について相当数の歌を用意したり、作歌の背景に関するある程度の資料の提供も必要になるはずである。

(七)

以上のような教材に対する分析、批判をふまえて、私は補助教材を加えた次のような単元構成を考えてみた。(短歌関連教材のみ)

- (1) 「わが青春」―近藤芳美(教科書)
(2) 「戦争と戦後と」(プリント)

(付)。「わが愛誦する近藤芳美作品」稲田定雄(プリント2)

(3) 「髪五尺―短歌十五首―」(教科書)

(付) ①「東海の」「やはらかに」「その子二十」「なにとなく

「清水へ」の解説、(「近代短歌要解」村田邦夫) ②「新しき」「東海の」の解説(「近代短歌の鑑賞と批評」木俣修)

③「その子二十」の解説(『現代短歌精講』(谷繁)(プリント3)

(4) 啄木作品 抄、付略年表(岡山操山高枝、神社楽二教諭の選による。)(プリント4)

(5) 生徒作品選 生徒二百ずつ(プリント5)

ここでは紙数の関係で、近藤氏にかかわる(1)(2)を中心に報告し、他については詳細は他の機会に譲りたい。

(一) 「わが青春」についての実践

教材については(4)で述べた通りであるが、指導目標を、(ウ) 作者のさまざまな出会いを通しての、短歌観の深まりを理解させること。

(イ) 作者が短歌に生きた必然性を共感を持って抱えさせること、の二点に絞ってみた。特に(ウ)については、作者が青春の日の憂愁を語り出す自己表現としての短歌から、友人を通しての、他者への出会いとしての短歌、さらに孤独な自己に対する短歌へと屈折しながら、重苦しい戦争の時代に生きた心の焦燥の表現としての短歌へと深まっていく過程を追うことに重点を置いた。

いま、生徒の書いた作者に対する感想の一部を紹介する。

○ 自由に表現することを許されぬ社会につぶされることなく、自分の意志を貫いて短歌作家の道歩んだ筆者の生き方はすばらしい

と思う。

などは、作者の短歌にかける思いをすなおに受けとり、感動しており、大半の感想はこの類であった。一方、

○ 筆者には筆者なりの意見があり、生き方があると思うが、戦争の間のことがわからず、その辺はなんとも言えない。

○ この文章だけでは、筆者のほんとうの苦しみがわからないような気がする。

――などの、文章についての批判もあった。

○ 苦しい時代、苦しい人生なんて人にはいらぬ、と私たちはよく思う。けれども、この文章を読むと、「苦しみ、たえきれない思いがあるからこそ、今自分は自分の人生を歩いているんだ」といわれているようで、私たちの考えをはずかしく思う。そして、彼を強い人だと思ふ。ただ、短歌に逃げていたといえる一面もあるので、もっと男らしく生きられたらよかったと思ふ。

○ 作者は戦争を批判し、またその苦しい状況の中で短歌を歌い続けたのは立派だと思ふ。しかし、やはり、少しは傍観者のなどところがあったように思える。

○ 常に孤独な人のような感じだが、そこは少し好きになれなかった。ただ静かにもを見つめる人の、鋭い真直な目が感じられた。などの、作者自身に対する批判もあった。

(二) 「戦争と戦後と」の教材化とその実践

「戦争と戦後と」は、雑誌「短歌」臨時増刊『現代短歌のすべて』(昭和52年7月)に「現代短歌の証言―戦後と歌と人間と」の

一編としてのせられた約六千字の回想的随想である。

(1) 内容のあらまし

上海陸軍病院に胸部疾患として入院中太平洋戦争が始まり、南方へ送られる途中、再発して広島で除隊、京城の家へ帰る。のち、妻と東京に出て設計技師として働くが、空襲で北浦和に疎開、そこで終戦を迎える。焦土と化した中で「アララギ」が復刊される。戦争中も短歌はぎりぎりのことを歌として重ねてきたが、これからは人間のことはとしての短歌があらゆるさまに作れるのだと思うと、歌わねばならぬ現実はいまにも多く、せき立てられるようにして歌を作った。

敗戦後も、異国の占領軍を「解放者」と呼ぶようなおろかさの中で、それはちがうというひそかな焦燥と怒りの思いを吐きつづけたが、そうした私の態度はかえって「傍観者」という批判を浴びた。戦争に生き残ったという同じ思いの者が集まって「新歌人集団」が生まれた。そして折からの「人民短歌」の人々との「政治と文学」論争、「第二芸術論」に代表される「短歌否定論」を唱える人々との「短歌の思想性」の論争を重ねた。

朝鮮戦争の時代から、虚構の繁栄に沸く現代まで、すべて激動の中にあったと言える。わたしたちが詩歌作家として生きることが、表現者として生きることであり、表現者として生きるとは、認識者として生きることであるといえる。

(2) 教材化の視点

いま近藤氏のこの文章を教材とする意味はどこにあるのか。菱川善夫氏は次のように述べられる。

「近藤芳美、宮柵二、山本友一、小暮政治、大野誠夫、加藤克己等、いずれも、世代的に見るなら戦争の時代に知性をうけ、戦争の悲惨にたえた世代によって、まず戦後の短歌は切り拓かれたのである。その中で、近藤芳美『埃吹く街』(昭23)と宮柵二の『小紺珠』(昭23)ほど、この時代をかくす代表的な歌集はないだろう。近藤氏の歴史のむこうに政治をみ、個と歴史の断崖に立つて、その底をみつめるいたましい知性と、宮柵二の魂の深淵をつき動かす孤独感こそは、単に戦後派短歌の双壁であるにとどまらず、戦後文学全体において、時代的苦悶をわかすものとして輝いているのである。」

近藤氏の「政治と人間への呪い、またそこを生きる知性のいたみと孤独の深さ」(菱川氏)こそ、「わが青春」の底流にありながら顕現しなかったものであり、生徒にきちんととらえさせたいことである。

「長い戦争と戦後の時代が続いた。その暗い、重苦しい日々、わたしは幾度となく生きることの恐いを重ねた。そうした日に、今どのように生きなければならないのか、心の中で叫びたい思いのしたこと」がどれだけあっただろう。その叫びをわたしは自分の歌とした。と教科書で抽象的にしか述べられなかった短歌とかかわる精神の歴史を、具体的に、実感的に吐露しつづけているといえよう。

(3) 実践のあらまし

授業で使ったプリントと、生徒のノート・定期テスト・アンケート(期末テストのあと実施)とによって実践のあらましを述べたい。

(一) 筆者の戦争中の行動を表にまとめよ。

読解の基礎作業として、まず筆者の行動をまとめさせた。

(二) 筆者の戦争についての態度は、どんな特徴を持つか。本文に即して整理してみよ。

(1) 「戦争の推移という現実を、わたしは東京にいて見ていたかた。」

○ 第三者的立場—傍観者。戦争という狂気に押し流されないで、冷静に現実をみつめてゆきたい。(Nさん)

(2) 「すぐれた才能を持っていた相沢正は前戦で戦死した。」

知識人としての戦争批判。知識人といわれる人々は、戦争に弱く一番に死んでいく。(Kさん)

(3) 「燈火管制下でトルストイの『戦争と平和』を読みつつけていた。……日本と戦う中国の奥地で今同じ『戦争と平和』が読みつつけられるという報道であった。」

○ 勇気ある編集者。現実を客観的に見つめる。敵味方を越えた人間の共感(Nさん)

○ 敵国にも平和を望む人がいる。若い世代、戦う同士にも、冷静に戦争を見つめる人がいる。(A君)

戦争のあからさまな批判者たりえなかった近藤氏の、戦争を見つめる目と、同じ思いでいる知識人への共感を読みとらせるとともに、短歌作家の筆のたしかさも味読させたかった。

(三) 筆者が「戦中」と「戦後」の社会に共通な点として認めているのはどんな点か。また、相違点として認めているのはどんな点か。

筆者の、知識人として現実を冷静に見つめていく態度を確認するための問いとした。

○ (共通点) 苛烈な現実、愚かさ。(占領軍—↓解放者と呼ぶ)

—人々がだまされつづけ、偽りの中で熱狂する。(相違点) 言論の自由(A君)

(四) 筆者が「戦中」「戦後」通して短歌に求めたものは何か。教科書の学習事項の再確認でもあり、この教材で指導のポイントとした点でもある。

○ 生きる現実をうたうこと。現実立ち向かい生きることの思い。「偽りを信じること」に対する焦燥と怒りの思い。(Nさん)

(五) 次の各項について考えてみよう。(抄出)

② 「からうじて生き得たわたしたちのため、戦争は三百万の死者をあらゆる前線に残した」を、普通の文に書き直し、両者を比較してみよ。

歌人近藤氏の、戦争の殺人者としての本質をみごとに衝いた的確な文の例として注目させたいと思ひ、生徒に書き換えを試みさせたのち、どのように書き換えてみても、もとの文の持つ厳しさには到底及ばないことを確認させた。

ここでは、期末テストで「私たちは、三百万人の人々の犠牲を払ってやっと助かった。」と書き換えたものとを比較させた答案から数例をあげる。

○ 書き換えた文章は、三百万人が死んで自分たちが生きのびたという事実だけを述べた感じだが、もとの文章はもっと戦争の重さ、暗さを感じさせる。

○ (原文は) 三百万を殺したのは戦争であることが強調されているが、書き換えると、私たちが助かったことと、そのための犠牲者

の多さが強調される。

⑤ 「再び日本の愚かさが始まった。」とはどういう点を言うのか。

同じく期末テストの答案の中から拾ってみる。

○ 戦前も真実については軍部からも目かくしをされて、それを見ることができず、また戦後になってさえ、真実を見極めることができずにいる幻影に惑わされている事実。

○ 天皇制ファシズムのもとで狂気のように戦争が叫ばれ、人々が軍部の偽りにおどらされていた事実。

○ 第二次世界大戦中などは、「お国のために」とか、「天皇陛下下ンザイ」といって死ぬのが普通であり、偽りの中で熱狂していた点。

後の二つは、戦争の「愚かさ」についてののみ触れている。筆者の知識人としての冷静な現実認識が戦中戦後を通して貫かれており、短歌作家としての真実を見きわめ、そこに歌を結晶させる姿勢の現われであることを把ませることに留意した。

一方ともすると「進歩的」とされる見方が、特定の「思想」への盲目的熱中となり、かえって民衆を誤った方向へ導くものとなったことに教授者として注意を向けさせることも必要であると思った。

(六) 「私が『傍観者』という批判をあびた」のはなぜか。

○ 他人が幻影に狂気しているときに、彼は現実を冷静に見つめていたため。

なお、次の語句について生徒に調べさせている。

兵站基地、緒戦、陥落、燈火管制、焦土、巻脚絆、凱旋、共匪、苛烈、魁偉、前衛、果敢な論客、第二芸術論、表裏する。烏賊。

(三) 補助教材として生徒に通読させた稲田氏の『わが愛誦する近藤芳美作品』について、その教材化の意図を記しておきたい。

近藤氏の前述(1)(2)の教材は、ともに回想記であり、自作の短歌がのせられていない。これを補うため「作品抄」を作って読ませることが望ましいとも考えられるが、氏の短歌は、教材としてはやや難解であり、特に時局にかかわり、思想性のつよいものこそ氏の本領があるとも考えられるので、二三の作品を選んで簡明な解説をつけ、しかも、氏の長所も短所も適切に指摘されている稲田氏の文章をとり上げたのである。

いま、その一部を引用しておきたい。

「④人を恋ふる宵々なりきつづけさまに唯物論全集買ひ来ては読みぬ。

⑤運行されし友の一人は郷里にて西鶴の伏字をおこし居るとぞ。

⑥国論の統制されて行くさまが水際立てりと語り合ふのみ。

⑦支那事変ひろがりゆくときものかげの遊びの如き恋愛はしつ
の④には、やや粗っぽい措辞のなかに、若々しい青春の渾沌が打ち出されている。⑤は思想問題を背景とした人間の運命について、まるで小説を読むような思いをさせる。⑥は線の太い詠みっぷりで、

「水際立てり」が斬新にひびき、「語りあふのみ」という複数形も、作品を分厚くしている。⑦は時局と個人の問題を、巧みに普遍化している。

ただ、戦場の生死を経た近藤氏におけるこういう思想的傾向が『埃吹く街』では「在るがままにあらき時代も受け行かむ其の限り吾が良心とせむ」「おどおどと伏せる眼まなこにいつの日にも真実を

見て居し民衆よ」その他の多くの社会、思想詠となっており、またこの程度まではわかるとして、第三歌集『静かなる意志』あたりからは（例歌をあげず申しわけないが）、詩語というよりは、しだいに理屈っぽい概念的な言葉が目立ってくる。」

④ 最後に、近藤氏の二つの文章を比較した生徒の感想を上げておきたい。

(1) どちらが興味深かったか。

教科書 二二人

プリント 七八人

どちらとも言えない 五人

(2) その理由（主なもの列挙）

△プリントの方がよいという意見▽

① 戦争に対し、当時の日本人とは違った冷静な目をもって興味深かった。

② 作者が戦争中どんな気持ちで過ごしたかがわかった。

③ 文章が明確でわかりやすく、筆者の考え方が理解しやすかった。

④

教科書は伝記的な内容を出していないが、プリントは、戦中戦後の複雑な社会状況と、それについての思想を見ることができた。

△教科書の方がよいという意見▽

① わかりやすかった。

② 同じ年齢のころの話で、共鳴できた。

③ 短歌との出会いが興味深かった。

(5) その他の実践のあらましと問題点

短歌抄『髪五尺』については、前半を講義方式で、後半は指導書の抜萃を与えて済ませた。他に前述のような晶子、啄木のプリントを配布し、部分的に教室で朗読した。

右のプリントは、主として二人の短歌をめぐる背景が、自我のめざめと、社会とのかわりを中心として解説されており、単元目標にそうものであった。生徒のアンケートで見ても好評であった。

『啄木短歌抄』は、『啄木短歌七二首を、青春、人生、故郷、家族、仕事、貧困、病氣、放浪、思想の八つのテーマに類聚し、『呼子と口笛』から四編の詩を加わせ、年表を添えたものである。

教室では、生徒一人に一首を担当させ、一時間で、五十人余に感想なり、解説なりを自由に発表させた。情景を写真で説明したりする時間も含めて一人当り五十秒足らずの発表なので、発表者も聞く生徒も緊張した一時間であった。

「短歌のすばらしさを感じた。短い歌の中に作者の気持や生活状態などがわかる。」「近藤氏とは状況が違っていたが、両者とも生きるため、苦しみに耐えるために作った短歌という点で、短歌を作ることの重みを感じた。」「人生の一面がまるでその場に横たわっているようで、あるときには主観的に、あるときには客観的にえがき出されているので、大変心にひびいてきた。」などの意見が代表されるように、啄木の「生」に接近しようとする生徒の熱意がひしひしと感じられる一時間であった。『生徒作品抄』については、実践が残されているので、後日の報告に回したい。

(八)

以上の実践を通しての短歌教材指導の意味と問題点をまとめてみたい。

短歌は一首一首独立した存在であり、それ自体で完結した作品世界を構築している。その意味で、一首の表現を隈なくさぐり、読みの深みに沈潜していくことは教室の作業での基本である。しかし、桑原武夫の「第二芸術論」をまっまでもなく、短詩型文学としての宿命的な欠点も存在する。そうした宿命を越えようとするさまざまな努力の先鋭として、戦後短歌は存在するとも言える。そうした短歌を十全に理解するためには、歌人自身の心の訴えを文章の形で聞くことも、同一場面、同一状況で歌われた類歌、連作から歌人が歌に托そうとした思いをより包括的に読みとることも大切なのであるまいか。

近藤氏の『戦争と戦後』に示した生徒の深い共感が、啄木短歌の理解と鑑賞にも大きな力となっている(前掲の生徒の感想)こと、わずか一時間の啄木短歌への厳しい接近から「歌が好きになり始めた」生徒が出てきている事実には、短歌指導の多様性と、さまざまな可能性を思わせるのである。

(九)

以上の実践から得たものをまとめてみると、

(1) 文学史的な視点で選択された有名短歌の羅列よりも、個性的な歌人について、その生活と短歌との接点を求めてゆくほうが、生

徒の共感が大きいし、作品への深まりも深いように思われる。

(2) 歌人自身が自己の作歌体験や思想、信条について語った文章を読ませるのは、短歌理解に大きな役割を果たす一方、歌人の厳しい生き方、物の見方、文章の影塚のしかたを学ぼうと有効であった。

(3) 同一作品について複数の解説者の解説ないし評論を紹介し、鑑賞の視点、方法を与えることも大切である。

(4) 教室では、一つの作品の分析、解釈にのみ終始せず、関連する他の作品や同一作者の多くの作品に接する方がよい。この場合も作品の文学史的位づけよりも、生活史的観点を重視すべきである。

(注)

1. 高等学校国語教育実践講座(四) 「読むことの指導と実践」(学燈社・昭37) P 188

2. 高等学校国語科教育研究講座 第二巻「短歌の指導」(有精堂・昭49) P 201

3. 「短歌入門」(筑摩書房・昭54) P 14

4. 岡山県立岡山操山高等学校(普通科、岡山市内四校総合選抜の学区をもつ進学校)一年生三クラスの生徒を対象に、昭和五四年十二月はじめに実施。

5. 「短歌における「自我」の形成」(「国文学」昭52年2月号所収)

6. 前掲「短歌入門」P 196

7. 「戦争と戦後と」(「短歌」(角川書店)

昭52年7月臨時増刊号 所収)

8. 「わが愛誦する近藤芳美作品」(「短歌」前掲増刊号所収)

(岡山県立岡山操山高等学校教諭)